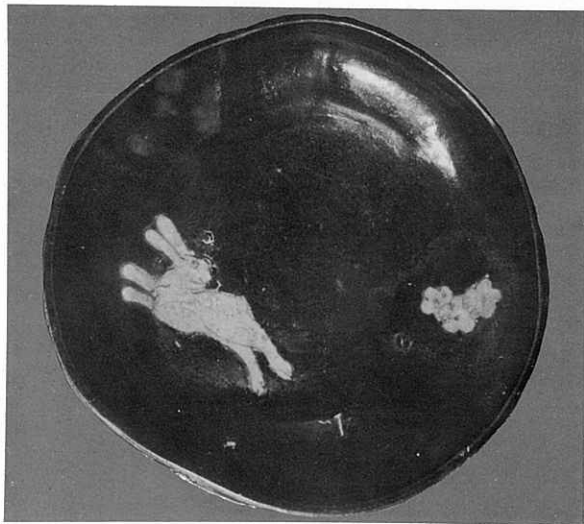


No.24

博物館報



初期伊万里 鉄砂染付兔文台皿 (百間窯) 径25cm、高台径9cm

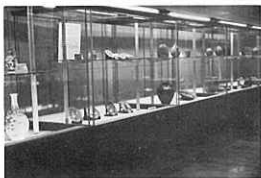
わが国の磁祖と認められる金ヶ江三兵衛と、その一団が、通説によると元和2年頃に有田泉山の磁砧を発見し、付近の上白川谷の天狗谷に築窯して、白磁の焼成を試み、また付近の板ノ川内の百間窯でも陶器と磁器が平行して焼成されたといわれている。

百間窯は短期間で、天狗谷窯は比較的長期にわたって焼成したらしいが、現在の研究では、この両窯ともいろいろと異議があり問題を残している。

この皿は残念ながら百間窯の出土品に若干の補修を加えたものであるが、貴重な資料である。左下には躍動する兔が後方を振りかえっている姿態を染付で白ぬきにし、また、右すみには3個の梅花文が同様の手法で染付してある。また、皿の輪郭が焼成の関係でややゆがんでいるが、それがかえって全体の力強い印象をあたえている。元和～寛永期のものと思われる。

目次	・初期伊万里鉄砂染付兔文台皿	—	1
	・常設展「肥前陶磁コーナー」	—	2、3
	・新遺跡資料展	—	4、5
	・肥前名刀展	—	6、7
	・日誌、行事	—	8

常設展『肥前陶磁コーナー』の紹介



常設展肥前陶磁コーナー

近世日本の窯芸の中核をなす肥前陶磁を現代の時点で、歴史的な意義付をなし、造形美術上の価値を鑑賞するために肥前陶磁器コーナーを中展示室に特設しています。

今回は古唐津系を中心に展示しているので、古唐津について簡単にふれてみたい。

古唐津は室町末期に開窯期を迎え東西松浦地方をはじめ武雄地域にわたって、その陶技は幅ひろく伝承され、それぞれ個性ある地域の中で発達し、茶陶、民陶へと展開した。

西肥前の東西松浦地方は中世の頃より松浦党が支配していたが、なかでも上松浦党の波多氏は岸嶽城を拠点として16世紀末まで統治した。その城趾は、現在東松浦地方の北波多村にあるが城趾に近い山麓に岸嶽5窯があり、これが古唐津系陶器の源流となった。

特に飯棚窯は創業期の古窯として注目され、この地域に2古窯趾があり、その規模は割竹式の連房窯である。また、下窯趾は県指定の史跡でもある。

展示資料の中から特に未発表の特珍品の古唐津系の作品3点についてふれてみたい。



古唐津叩き手

板おこしと叩き作りの技法は唐津特有のもので、特に叩き作りは16・17世紀の日本陶芸界では珍しい陶技である。

この意は、北朝鮮の成型技法が室町末期に導入されたことを裏付けるような技法が底流している。

ロクロの上鏡に胎土を打ちつけ、板おこしをして紐造りの胎土を輪積みにして次第に形を整えあげ、内側と外側から打ち出して成型してゆく「叩き手」の技法が力強く反映している。釉薬は土灰を使い成型はやや粗野で完全ではないところがかかって古格と歴史を感じさせる。



古唐津皮鯨手茶碗

斑唐津の口辺全部を鉄釉でふち染めしたもので、その色が鯨の皮身のところににているので、この名があるが、伝世品は非常に少なく貴重な文化遺産の一つである。

釉は特色あるワラ灰釉をもちい、釉調は灰白色が主で16世紀末と思われる。

優秀な斑唐津は、主として、帆柱窯で焼成されているようだ。この茶碗は長年、使用したのもらしく、茶の渋などによって貫入があらわれ、茶陶的効果を自然と生みだし、古い格調を感じさせる。

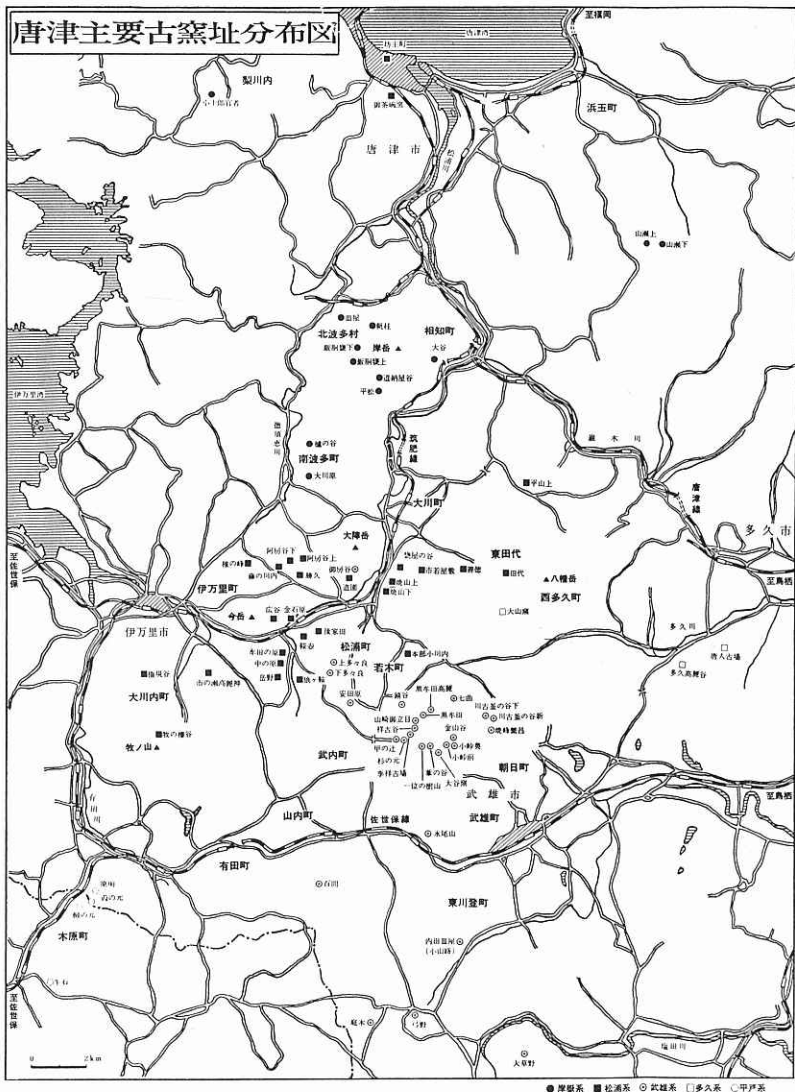


古唐津水指

古唐津松浦系の古窯の中で最も規模が大きく陶工群窯の地であり、永く続いた窯場はこの「椎の峰窯」である。

唐津藩の御茶碗窯をはじめ、唐津領内諸窯の陶工は、この窯の工人の分派であり、土採り場の笠権は2kmの距離にあり商港、伊万里津へも近い環境であり、上窯、中窯、下窯があり、江戸中期まで続き、その後、古窯の対面の丘陵に「新窯」が築かれ、江戸末期から明治まで続いた。

この水指は、桃山末期頃のもので釉薬を部分的に流しかけた容姿は、野性的な力強さと成形美とが深遠なふんいきをかもし出している。



肥前陶磁の系譜より掲載

新遺跡資料展 — 佐賀県における昭和49年発掘調査を中心とした回顧

主旨 昭和49年に、県内各地では数多くの遺跡が発見され、県内の諸機関、研究者によって、調査研究が実施されてきた。

即ち、縄文時代の食糧貯蔵穴跡として注目されている、坂の下遺跡の第3次調査が実施され、県内最大級の貝塚や、漁撈用具の石錘が多量に発見された。

弥生時代では、県中央部に存在しなかった大甕棺群が発見されるとともに、水田地帯の生活跡の調査が各所で実施された。また、昭和30年代初期に発見されていた銅剣の把頭飾が再確認され、大陸文化交流を追求するうえに注目されるようになった。

古墳時代は、当県においては数少ない住居跡の調査や、過去に遺物のみが採集された古墳の再調査が試みられ、史跡指定のための調査等も進められた。

歴史時代は、国分寺や廃寺の調査が実施され、県内の奈良・平安時代の寺院跡の解明が始まった。

そこで、これらの新発見資料を県内市・町・村教育委員会や研究者の協力を得、これらの資料を一室に展示し、昭和49年の発掘調査及び成果を広く県民に紹介するとともに、郷土の原始・古代文化の理解と、文化財保護意識の高揚に資する。

主催 佐賀県教育委員会・佐賀県立博物館
場所 佐賀市内1丁目15の23 佐賀県立博物館
期日 昭和50年1月25日～2月23日

展示内容

(縄文時代)

- ・西有田町、坂の下遺跡出土品 (中期の土器・石器・木の実)
- ・鹿島市、納富分遺跡出土品 (後・晩期の土器・石錘・十字形石製品・短冊形石器・剝片鉄他)
- ・呼子町・小川島貝塚出土品 (後・晩期の土器・石錘・石斧・魚の骨・動物の骨他)
- ・佐賀市・大門遺跡出土品 (後期の十字形石製品)

(弥生時代)

- ・神埼町・荒壁貝塚出土品 (把頭飾・石剣)
- ・三田川町・二本黒木貝塚出土品 (把頭飾・器台・石包丁・石斧他)
- ・多久市・牟田辺遺跡出土品 (中期の各種埋葬用甕棺

- ・各種石器)
- ・東脊振村・三津永田遺跡出土品 (内行花文鏡)
- ・東脊振村・大曲遺跡出土品 (内行花文鏡)
- ・神埼町・日の隈山西北山麓出土品 (不明鏡片)

(古墳時代)

- ・鳥栖市・本川原遺跡出土品 (各種壺)
- ・北茂安町・妙覚院遺跡出土品 (各種武器・馬具・装身具)

(歴史時代)

- ・大和町・国分寺遺跡出土品 (各種古瓦)
- ・小城町・寺浦廃寺遺跡出土品 (各種古瓦)

図録の発行

展示資料に関する目録を発行する。

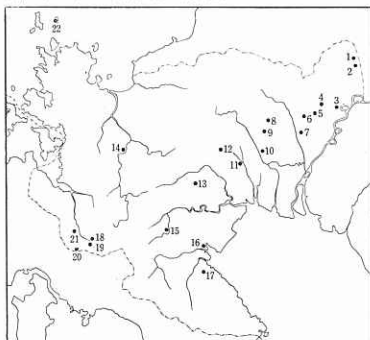
「新遺跡資料展」

— 佐賀県における昭和49年
発掘調査を中心とした回顧—
定価 200円

観覧料 常設展と併設

大人50円・大生30円・小中生20円

(昭和49年 調査および資料発見遺跡分布図)



- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1. 小倉弥生遺跡 (基山町) | 12. 寺浦廃寺跡 (小城町) |
| 2. 本川原遺跡 (鳥栖市) | 13. 牟田辺遺跡 (多久市) |
| 3. 妙覚院境内古墳 (北茂安町) | 14. 寺ノ前遺跡 (相模町) |
| 4. 町南遺跡 (中原町) | 15. 潮見古墳 (武雄市) |
| 5. 三塚山古墳地 (上藤村・三田川町・東脊振村) | 16. 鹿土崎古墳 (有明町) |
| 6. 二本黒木貝塚 (三田川町) | 17. 納富分遺跡 (鹿島市) |
| 7. 荒壁貝塚 (神埼町) | 18. 山辺沼古墳跡 (有田町) |
| 8. 大門遺跡 (佐賀市) | 19. 天神の森上古墳跡 (有田町) |
| 9. 増田遺跡 (佐賀市) | 20. 坂の下遺跡 (西有田町) |
| 10. 石木遺跡 (三日月町) | 21. 小川島貝塚 (呼子町) |



坂の下遺跡出土 1/2



牟田辺遺跡出土 1/2



荒原貝塚出土 1/2



二本黒木貝塚出土 1/2

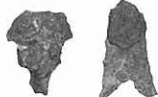


1/2



妙覚院1号墳出土

1/2



1/2



寺浦庵寺出土 1/2

肥前名刀展

主旨 日本刀は、もともと武器としてつくられたことはいままでもないが、時代の推移とともにその役割も大きくかわり、現在では美術工芸品として愛好され、鍛鉄のすぐれた文化財として新しい生命を持ち続けている。

肥前では、江戸時代の初めから刀工忠吉一家及びその門人によって、数多くの名刀が作られてきた。これらの肥前刀は、新刀としてつくりかゝらば、実戦的なものとして尊ばれ、刀剣史上すぐれたものとして高く評価されている。そして独自の風格高い作風は、見るものの魂にせまってくる凛々しきを持っている。

当館では、肥前忠吉各代の作刀を初め、その門人が生んだ数々の名刀と、それに付属する鐔、小道具類及び文献等を一堂に展覧し、肥前刀のもつぐれた芸術性を追求するとともに、刀剣に対する理解と認識を深めようとするものである。

主催 佐賀県立博物館
後援 佐賀県刀剣会
会場 佐賀市内城1丁目15番23号
 佐賀県立博物館 大展示室
会期 昭和50年3月2日(日)～3月23日(日)
 (会期中無休)
観覧料 大人 大・高生 中・小生
 個人 100円 50円 30円
 団体 (80円) (40円) (20円)

講演会日時 昭和50年3月15日(土)午後1時30分
 から(県立図書館と共催)

会場 佐賀県立図書館講堂

演題 「肥前の刀と鐔」

講師 刀剣研究家 福永啓剣氏

(肥前の刀と鐔の著者)

主な展示内容

- | | | |
|----------|---------------------|------|
| 1. 刀剣 | ・初代忠吉刀剣 | 約20口 |
| | ・2代忠吉～9代忠吉刀剣 | 約20口 |
| | ・河内大塚正広系などの傍系刀剣 | 約30口 |
| | ・現代肥前刀 | 約10口 |
| 2. 鐔・小道具 | ・忠吉系、宮田系など | 約60点 |
| 3. 文献 | ・藩主注文状など | 約20点 |
| 4. その他 | ・作刀工程資料、刀工関係遺跡などの写真 | 約40点 |



初代忠吉肖像図

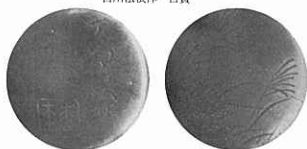


鉄地丸形纏目覆輪高内彫地透嵌雲龍図 肥前国向井吉兵衛於武州江戸作



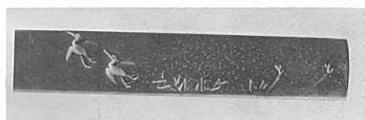
鉄地丸形地透松栞図 肥州住勝監作

古川松根作 目貫

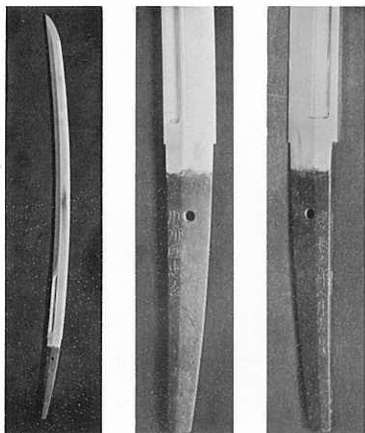


丁卯秋目松園印

片切彫秋草園

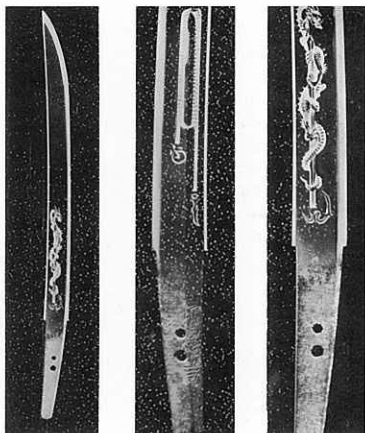


古川松根作 弁 肉彫色絵網干に龍園



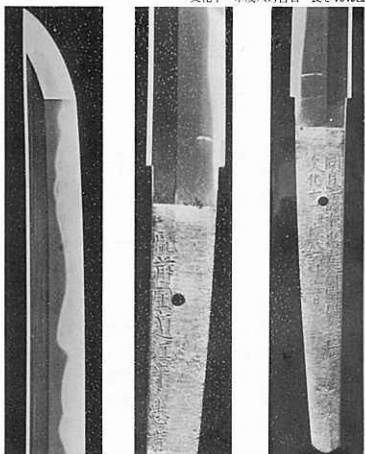
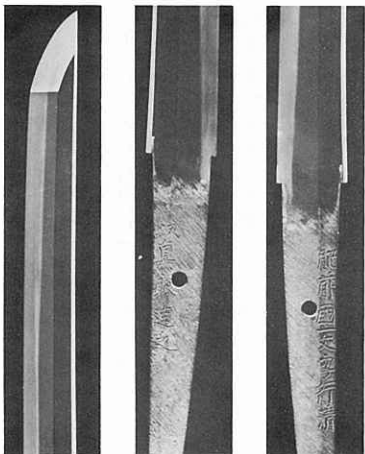
初代忠吉作刀 銘肥前国忠吉 慶長5年8月吉日 長さ68.7cm

初代行清作脇差 銘肥前国一文字行清 以真鍛造之 長さ57.0cm



初代忠吉作 脇差 銘肥忠吉 例物藤原宗長(花押) 長さ39.5cm

6、7代忠吉合作刀 銘肥前国近江守忠吉 扇息橋本忠左衛門尉忠広 文化十一年戌八月吉日 長さ70.9cm



博物館日誌

10月27日	「第24回佐賀県美術展」作品搬入	め来館
10月29日	「第24回佐賀県美術展」入選入賞者発表	12月1日 「松方コレクション展」終了(総観覧者数
11月2日	「第24回佐賀県美術展」開場	50,379名)
11月7日	茶室「清恵庵」運営協議会開催(応接室)	12月5日 「佐賀県学童美術展」開場(12月8日まで
11月8日	九州大学教授岡崎敬氏来館	大展示室)
11月10日	「第24回佐賀県美術展」終了(総観覧者数	12月7日 常設展開場
	11,316名)	12月10日 佐賀大学特設美術科総合展開場(15日まで
11月16日	「松方コレクション佐賀展」開場式、保利	大展示室)
	茂氏、池田知事、小原県議会議長、佐賀市	12月12日 古賀秀男氏「常設展」観覧のため来館
	他多数来館	12月18日 佐賀県高等学校美術展開場(22日まで 大
	相知町移動博物館開催(19日まで)	展示室)
11月22日	杵島商業高校生15名茶室利用	佐賀西高校生15名茶室見学
11月26日	出納室事務指導監査	12月27日 消火訓練
	佐賀女子高校生45名茶室見学	12月28日 執務納め式
11月27日	森副知事「松方コレクション展」観覧のため	

●行事お知らせ

修学旅行の計画に博物館の見学を折込んでください。

常 設 展	
佐賀県の歴史と文化展	12月7日～3月31日 大 人50 (30) 大・高生30 (20) 小・中生20 (10)

企 画 展			
展 覧 会 名	会 期	観 覧 料 ()内は団体料金	備 考
新 遺 跡 資 料 展	1月25日～2月23日	常設展料金を含む	県内の遺跡のうち、近年緊急調査、学術調査によって出土した資料を中心に、関係資料を公開、資料をおとして当時の人々の生活のあとをかえりみながら、遺跡に対する認識と文化財保護思想の普及と向上をはかる。
肥 前 名 刀 展	3月2日～3月23日	大 人 100 (80) 大高生 50 (40) 小中生 30 (20)	刀剣は日本の長い歴史の中でさまざまな役割を果たしてきた。なかでも肥前刀は、忠吉一門によって多くの名刀を生み、刀剣史上その作風と作刀数に大きな位置を占めた。 当館では、忠吉を初めその門人がつくり出した名刀及び肥前、小道具類を一並に展覧し、刀剣のもつ意義と肥前刀の美術工芸史上における価値を再認識するために資する。

●新刊書案内

清水平一郎原著、川副博著

覆刻、佐賀県方言語典一斑の出版について。

かねて佐賀方言を研究されている当館の川副博先生が、明治36年清水平一郎著の佐賀県方言語典一斑を訂補覆刻出版されました。佐賀県方言の文法的な理解には必須なものです。A5版、208頁、頒価 350円(送料は別)申込みは当館へ。

博物館報	第 24 号
発行年月日	昭和50年2月1日
編集	大 園 弘
発行	佐賀市内一丁目15～23 佐賀県立博物館
印刷	合資会社 音成印刷所